

基調講演

「右手にスコップ、左手に缶ビール」が活動の原動力

NPO 法人グラウンドワーク三島専務理事・都留文科大学教授

渡辺 豊博氏

1950 年秋田県生まれ。東京農工大学卒後、静岡県庁入り。企画総室技監、NPO 推進室長等を歴任。1992 年地元・三島市の水辺自然環境の再生と復活を目的に「グラウンドワーク三島」を設立。英国発祥の市民・NPO・企業・行政のパートナーシップによる環境改善活動「グラウンドワーク」を日本で初めて導入し、「右手にスコップ、左手に缶ビール」の合言葉のもと、源兵衛川の再生やホテルの里づくり等、60 力以上のプロジェクトを実践。2008 年より都留文科大学教授。日本で最初の富士山学や市民活動論等を開講。これまでに、あしたのまち・くらしづくり活動賞、地域再生大賞、市民普請大賞等を受賞。著書に「英国初グラウンドワーク『新しい公共』を実現するために」、「先生、NPO って儲かりますか？ー若者たちが地元で賢く生きる方向ー」等がある。



「右手にスコップ、左手に缶ビール」が活動の原動力

NPO法人グラウンドワーク三島専務理事・都留文科大学教授 渡辺 豊博

ボランティア活動は自分のためにやる？

皆さまこんにちは。私の位置から皆さまが遠いので、よくわかりませんが、大変、元気そうな、少し生活と公益的な活動に疲れたような雰囲気の方々に集まって頂きまして、ありがとうございます。

公益的な活動ということで、よっぽど個人的な時間があるのか、金が余っているのか、生活と心に余裕があるのか、というような感じの方々が、本講演会に集まっていたら、ご苦労さまでございます。

まちづくりについては、私は25年間にわたり、やり続けてきていますが、なんのためにやっているかの信念と哲学を持つことが大切だと思っております。NPOやボランティアを含めて、「人のためにやる」という、説明・考え方を聴くことがありますか、少し嘘っぽい感じを抱えています。

私の考え方としては、「自分のために」にやっているのではないかと考えています。自分が心地よく、素敵で安全、安心なまちに住んでみたいと思う人が、先頭を切って、「自己犠牲」の気持ちで公益的な活動に関わることを指していると考えています。自己犠牲だと思ってしまうと疲れちゃうので、社会の中において、もう一人の自分というものを発見し、多様な活動を通して研鑽する活動ではないかと思えます。

現場には社会の真理と事実がある

現実の社会には、「光と影」が存在します。その混沌とした難しさの中で、課題解決のために、いろいろと頑張ることを、「NPOの永平寺」とか、「大人の学校」としての機能があると評価でき、これらの公益的活動はつらくて面倒くさいものです。大変なことは、地域住民の合意形成と協力体制の構築です。住民は、よくしゃべり、ものすごく口は達者です。しかしながら、なかなか活動現場には来てくれません。

今、参議院予算委員会が開催されていますが、国会議員も口が結構達者です。彼らは、現場に頻繁に出かけるのでしょうか、出かけたとしても10分位しかいないのではありませんか。被災地の仮設住宅で、安倍首相は生活したことがあるのでしょうか。1ヶ月ほどお住みになったら、カビやダニの発生がひどいことなど、現実的な住環境の厳しさ、実態を的確に理解していただけるものと思えます。

3月11日。皆さんは、どんな日か、ご存知ですね。実は、私は被災地に今まで80回ほど行っておまして、地球を2周半ほどした勘定です。特に、石巻市に多く通っていますが、三島市から600kmの距離があります。往復1,200km、時間的には片道で約8時間かかります。80回も通っていますので、被災地の現状は承知しているつもりです。

私が、地域づくりに、25年間も関わってきて思うのは、被災地を含め、現場に頻繁に来て、支援活動を継続的に続けている人が少ないことです。総論的な世間話や海外での先進的なまちづくりの事例紹介は、専門家から提言、紹介、推奨されます。具体的にどうすればいいの

か理解できず、抽象的な話ばかりです。課題を抱える現場に来て、一緒に汗をかいてくれる人が少ないわけです。

そういう意味では、地方は、高齢化、少子化という潮流の中で、ますます人口規模が少なくなります。よっぽど現場に魅力を作らないと、地方の応援団が少なくなってしまうし、自分の後ろを振り向くと、奥さんもいない、こない、当然こない、やっぱり、こないになってしまいます。

私も昔、「おはよう川村龍一」のラジオ番組で、土曜日にパーソナリティーをやらせて頂いたことがあります。3回にわたって、富士山頂から、川村さんとともに登山して、放送したこともございます。

私は、今まで85回ほど、中学校2年生から富士山に登っております。富士山のゴミやし尿問題などの環境問題については、現場の実情をよく知っています。しかし、実際、富士山に登って、ボランティア活動に来てくれる人は少ないですね。まあ、富士山の現場に来るのは、大変ですけどもね。

しかし、多様な環境問題や社会的な事件は、現場で起きていますので、現場には「社会の真理と現実」が存在しています。現場に来なければ、社会の真理と現実を、ボランティアの哲学も思想も、社会人としての社会的な役割も義務も十分に理解することは難しいと思います。自分が、今、社会の中で、どの立ち位置にいるのか、地域がどのように変化していつているのか、人々は一体今何を求めているのか、そういう生活者の真実の思いや悩みを正確に理解・認識・把握することは難しいと考えています。

公共事業から公協事業へ、そして交響事業に

今日の講演会の主催は、国土交通省さんですが、私は昔、静岡県庁に勤務しておりまして、一応、一級土木施工管理士、技術士補、一級造園管理士など、いろいろな国家資格を取得している土木技術者です。そういう意味では、「行政の暴走」というのを、先頭を切ってやってきた人間でもあります。

当時は「公共事業」の呼び方を変えた方がいいと上司に提案したら、「ジャンボ君、なんでそんな呼び方をする必要があるんだ、失礼ではないか」と怒られました。「公が民から離れ暴走しているので、公が狂うと書いて公狂事業と呼ぶべきなんです」、「これからは公が民と協働するという公協事業となるべきであり、最終的には交響事業が理想形なのです」と反論しました。

公共事業の理想的な姿は、「交響曲」的な事業ですよ。私、ブラスバンドやオーケストラで、ホルンを吹いていたのですけども。演奏者は100人近くいます。オーケストラにもなると、一人の音が飛び出ると音楽を奏でられないんです。全体として、一つの音にしなければならぬ。将来は弱者であろうと、お金を持っていようと、太っていようと、痩せていようと、美人であろうと、みんな一緒です。一緒になって、地域というものを考えられるような「意識の変革」を、今日、ここに来ていらっしゃる人は、どうやってリードしていくのか。すなわち、「人間マネジメント」を理解していなくてはなりません。この力を身に付けないと、現場の一人一人の意識を変えることはできません。

まちづくりとは、「コンクリートに魂を入れる」仕事だと考えています。コンクリートを使用した施設づくりについて否定しているわけではありません。施設に、地域の思いや個性、特性、文化、歴史などが、特徴的な魅力や個性として含まれていますか、皆さまは関わりを持ったものですかと聞きたいのです。

何か目新しい施設を造れば、住民の際立った評価を受けられるということなのでしょうか。会場近くの大坂城は当然、際立って建物は立派ですが、豊臣秀吉の評価は、当時、新しい社会的な「統治の仕組み」を作ったことではないでしょうか。それも地方の統治の仕組みを作ったことではないでしょうか。

武田信玄には、彼を支える優秀な武将が沢山いました。彼らを約30年かけて育てたのです。ところが、武田信玄が亡くなった後、息子の武田勝頼が、嫉妬と疑念から、武田軍団の知恵者・パートナーを殺していきました。その結果、短い期間で、天下取りも可能な無敵軍団の武田家は崩壊していきました。

「人は石垣」と、武田信玄が言っていた割には、息子の勝頼は「人はただの石」にしか見えなかったのですかね。それに、嫉妬、誤解、批判、足の引っ張り合い、これらは、本当に非生産的な活動ですよ。非常に不条理にして、非生産的な国家のしくみ、これをこのまま、地域のしくみに転換すると中央集権型の仕組みとなり、結果、地域住民の主体的な意思は醸成されず、依存と甘えが蔓延して、発想は貧困化・硬直化して、地域全体が衰退して行くという、危険性があるわけです。

区画整理事業ではまちはかわらない

ところで、私が承知している範囲では、区画整理事業をやって成功した地区は少ないと考えています。駅前を整備したらサラ金のお店が増えて、特性のないまちが増えたのではないのでしょうか。例えば、静岡市から浜松市までの東海道沿線の街々では、区画整理を切っ掛けとして、まちの特性や歴史性を壊してしまったのではないかと考えています。実際、人通りは少なくなり、多くの住民は近隣の静岡市に買い物に出かけ、まちから買い物客が吸い上げられてしまっています。皮肉に静岡市は、どんどん発展し、江戸時代からの歴史的なまちはどんどん衰退していきます。

そういうことでは、地域に根を張り、地域の特性を理解して、ドロドロした人と人との関係もやや理解しながら、さて、皆さまの故郷をどうしていくのが勝負どころです。演壇から見てみると、人生の時間が残り少ないような人が多いような気がします、戦いを続けられますか。

というわけで、凝縮して結構効率的に、物事をどんどん進めないと、皆さまの思い出話、趣味嗜好のNPO、市民団体の活動になってしまうんじゃないですか。バトンタッチする人がちゃんといますか。いいさ俺で燃え尽きれば。カッコいいですねえ。日本は、過去、零戦や人間魚雷回天をつくり、玉砕していった国です。NPOも全く同じように玉砕するのですか。何にも手だてってものがないのですか。よくそれで大人の世界で生きてきましたね。本当に、失礼で不遜な話をしていますね。

そろそろ、怒りでものが飛んできそうですね。大丈夫ですよ。飛んできたら投げ返します。そういう意味では、この全面に掲示されている写真を1枚だけ見せ、講演会を終了してしま

ったこともあります。質問で、「すみません、この写真のあとに何かあるんですか」と聞かれました。ありますよ、136枚もあります。というわけで、そろそろ次の写真を、お見せしたいと思います。

グラウンドワーク三島の合言葉は「右手にスコップ・左手に缶ビール」

「グラウンドワーク三島」の諸活動を紹介します。活動の説明には、わかりやすい言葉が大事です。皆さんもポスターセッションで活動を紹介してくれていますが、誰にでもわかるキーワードというか、合言葉はお持ちでしょうか。これは重要です。長く説明しないと、どんな活動をしているのか、わからないような活動は、他人には思いが伝わりにくいものです。ところで、活動の主体者自身が、自分たちの活動の真意を的確に理解しているのでしょうか。明快なキーワードで説明ができることが大切なのです。

グラウンドワーク三島は、「右手にスコップ、左手に缶ビール」が合言葉です。冗談ですが、今は少し変わりました。「左手で缶ビールを飲み過ぎで、痛風になってしまい、今は、左手に焼酎」に変わりました。活動の経過とともに、合言葉の表現も変化していくものです。

さて、写真の向こうにいるのは、韓国の大学生です。真ん中は私のゼミ生です。こちら側は高校生です。耕作放棄地を約20,000平米借りて、三島そばの復活や22品種の野菜を作っています。とにかく日本の学生でも韓国の学生でもイギリスの学生であろうと、農村地帯に行き現場で汗を流し、終わったら、参加者でビール飲み、交流するという非常に単純な活動です。それが、私たちの合言葉の意味です。

グラウンドワーク三島の役割は、調整・仲介役の役割です。今、行政は結構、市民に近づいてきています。相互の関係は強まってきていると思います。企業は、昔から地域の中で、それなりの力もあり、行政との関係を持っています。市民と企業は、公害問題で対立した時代もありました。三者の関係を考えますと、それぞれにすごい能力と専門性を持っています。問題は、相互の連携が希薄で、バラバラの関係だということです。いや、うまくやっているよ、うまくいき始めているよと、いう地区はもちろん承知していますが、もっとうまく行く方法というものを考えたらいかがでしょうかという提案です。

人は、他人のことを批判していると、非生産的な関係になります。何もいいことはありません。しかし、人を褒め上げると、相手は、悪い気持ちにはなりません。これは、あくまでも、お互いが、お互いを褒め合う関係です。しかし、お互い同士でほめあげると気恥ずかしいですね。ということで、相互の真ん中に、それぞれの長所と問題点を知っている中間支援的な団体、インターメディアリーという役割の団体が必要となります。

市民・NPO・行政・企業とのパートナーシップを形成

グラウンドワーク三島は、25年前からこの調整・仲介の役割を果たしてきています。行政もできなかったこと、市民もできなかったこと、企業もできなかったことを、マイナスに捉えるのではなく、プラスに捉えて、相互に良き関係を構築していきます。例えば、三島では、今から50年前頃から、上流地域に、多くの地下水利用型の企業が進出しました。

その結果、次第に、「水の都・三島」から、地下水が消えました。市民は川にごみを捨て、まちを汚しました。そして、行政と政治の悪口ばかり言っていました。行政は言い訳ばかり

言っていました。市民に情報公開しないで勝手に暴走して公共施設を造ってきました。この関係にメリットがありますか。すべて税金が使われています。そういう意味では、この三者の関係を一体化して有機的に連携させて、環境再生にとりかかりました。

地下水利用型の企業には、水質的に問題のない使用済みの冷却水を、汚れた川に供給してもらいました。市民はごみを捨てず、川に入ってごみ拾いを始めました。行政は、広く市民の意見を聞いて、市民の欲しいものを造り始めました。グラウンドワーク三島は、私たちがコーディネートしただけのことです。

このコーディネーターには、お金はかかっていません。立派なことをやろうとするとお金がかかるというのは嘘です。立派なことをやろうとする時は、お金を持っている人を飲み屋に行って探せばいいのです。結構貧乏そうに見えても寄付してくれる人はいます。

結構、金遣いが粗そうですけど実際は借金まみれの人もあります。ですから飲み屋で人の話を聞きながら「この人、金をもっているな」、「寄付は難しいな、ああだめだな」、「金は持っているけど少し心が貧しそうだな」、ということ、皆さんはリサーチする力を持たないと、活動を大きく成長、発展させることは難しくなります。懐に入り、真綿で首を絞める、そして吸血鬼のように、その人の善意の意識に近づく。これは公益的活動を発展させていくための特徴的な取り組みだと考えてください。グラウンドワーク三島は、そんな楽しい役割を果してきています。

営利事業と非営利事業が組織体制

グラウンドワーク三島の組織の仕組みについてです。年間の予算が、1億円ぐらいで、職員が11名います。プロジェクトは、現在、60プロジェクト。コアスタッフが13名、スタッフが約130名います。20の市民団体、8000人が集まったネットワーク組織であり、20団体から4～5人のスタッフが出てきており130名になります。

このセンターの仕事を事務局と私が担い、プロジェクトごとにコアスタッフが一人入りスタッフが5人入り、地域の人たちが入っています、これが60箇所になろうと100箇所になろうと何の問題もなく、活動を展開して、具体的に地域の課題を解決していく、そういう、とてつもない潜在力を持った組織です。

ですから、何かを成そうとする時は、仕組みが大切なので、どういう組織体制を作り、どういう責任の所在を明確化するかをしっかりと考えなければいけません。これはグラウンドワーク三島の仕組みですから、本当にいいのか、悪いのかを、大阪型か地域型で考え、創るのです。当然、活動は大事ですが、並行して、組織を運営する力を、リーダーは身に付けないと、持続的・発展的な活動展開は難しくなります。

リーダーの能力・専門性で大切なことは、ビジネス力です。やはり、資金を確保できるリーダーは社会では高位の地位につきます。資金を稼いでくる人が、リーダーになります。NPOだってリーダーの役割を果たしたいと考える人は、資金を安定的に確保できなくては不適といえます。もしも、資金を確保することが難しいことなら、活動を支援してくれる人を紹介すればいいのです。人を紹介できないなら、的確な情報を持ってあげればいいのです。いろいろな必要事項を持ってこられる力を身に付ければいいのです。これは「専門性」であり、その力を持っていたら、効率的に組織を運営管理することができます。

NPO が、役所のように組織を縦割りにしてしまったり、役所の天下り組織のように有名無実の理事会にしたりして何になりますか。グラウンドワーク三島は、頻繁に理事会を開催しています。会議が終わったら、間違いなくみんなで飲みに行きます。しゃんしゃん理事会では、組織が硬直化していきます。

多様な市民活動を 3 つの戦略的なアプローチで展開

現在、活動開始から 24 年が経過しました。そして、20 団体と 8000 人が参集し、実践地は 60 箇所。三島市の人口は、11 万人で、町内会は 124、本会が関わっている町内会は 58、約 4 万 8000 人の町内の皆さんと連携をしています。市民活動は、町内会の普通のおじちゃんやおばちゃんとの連携なくして、組織の足元や足腰は強化できません。

ある問題意識を持った人たちがいる範囲内のことに対応していればもちろんいいのですが、それでは、地域を具体的にを変えることは難しいと思います。地域に住んでいるのは、おじちゃんやおばちゃんたちであり、その人たちと連携しながら、その人たちが抱えている問題を真摯に聞き取り、皆さまの問題意識の共有化を図り、活動分野と整合性を図りながら、その活動分野の範囲の中で、何がそのおばちゃんやおじちゃんのために役立つのかを真剣に戦略的に考えていかなければ地域を変えることはできません。

私たちの活動の仕組み、理念として、「戦略的アプローチ」があり、3 つのアプローチがあります。

1 つ目は「ボトムアップアプローチ」です。とにかく現場から、下から地域を変えていくのです。これは、結構大変なことで、辛い活動です。地域に入って、住民の合意形成をしないと、現場から物事を変えられず、課題も解決できません。時間もかかり、大変です。代行の料金や飲み代が必要となります。こんな馬鹿らしいこと、やめた方がいいかもしれません、好きなことだけをやっていれば幸せかもしれません。合意形成に、2 年半から 3 年半もかかり、大変ですからやめた方がいいと思います。

昔、公務員は、現金でボーナスをもらっていたので、その写真が新聞に掲載された時に説明会に地域に行くと、「お前いいよな。こんなボランティアをやっていてもボーナスをもらえて、俺たち住民は命がけで生きている中で、ヒマだから、ここに来ているんだろ」と批判されるわけです。

そんな罵声が飛び交う場所に、公務員がボランティア活動の一環として、何十回も出向きますか。行かないでしょう。公務員は用事がある時しか、現場には行かないわけです。NPO は用事がなくても、行くわけです。この意識の違いは大きいです。用事がなくても来た人とは信頼関係が生まれやすい。用事があるから来た人は用事を済ませれば関係は終わりです。仕事で来ただけであり、当たり前関係でして、信頼関係が生まれますか。NPO の特性・特徴は、用事がなくても、忙しくても、現場に行きます。そういう力と余裕を持たなければ、多様な人たちとの信頼関係はつくりにくいと思います

2 つ目は「パートナーシップアプローチ」です。みんなでやれば怖くないということですから、一つの団体でやろうとするのではなくて、いろいろな団体と連携を取りながら、お互いの特性を認め合いながら、得意技を持った人たちをうまく使っていくのが、パートナーシップアプローチです。

3つ目は「ホリスティックアプローチ」です。これは包括的・総合的というのですが、イギリスにおいては最近どこのNPOにいても、ホリスティックという言葉が使われます。意味は、行政の基本的な役割は、人の心を変える仕事であるということです。行政の仕事は、お金を補助金として配分し、公共的な施設を造ることだけではなく、地域の人たちの心を変える仕事だということです。

イギリスでは、過去、長く、毎年3千人近い移民を受け入れ、今では350万人もいるのではないかとわれています。人口は、6000万人弱ですので、移民が大きな要素を占めています。多くは、生活保護や社会保障に依存しているので、自立してもらわないと国家の資金的な負担が増加してしまう。その対策を担っているのが、NPO、イギリスではボランティアセクターです。

社会に依存せず、自立して働くような意識に心を変えなければならないのです。犯罪を起こさせないこと、売春、窃盗、強盗、エイズ、小学校の妊娠問題など、社会的な課題が山積みです。大人や子どもたちの心を変えなければ国がもたない。そういうことを、国が率先してやろうとしているんです。

日本の被災地での対策を見ると、鉄道復旧や高速道路を早く整備すれば復興が成功だと主張しています。現在、被災地の海岸線に高さ7m20cmの海岸堤防を、200キロ以上も建設していますが、何かが大きく変わるものなのでしょうか。素敵な白砂青松の海岸は、破壊されてしまい、故郷の原風景はどうなってしまうのでしょうか。私も現場の実態を見て、血の気が引きました。皆さんも1回見に行ってください。高さ15m30cmの海岸堤防もありますので、どういふものか。東北復興の成功が世界の見本になると、安倍首相も息巻いています。私には視点のずれを感じており、その効果を信じられません。

市民力で環境再生から観光振興・空き店舗ゼロのまちへ

三島市では20年前、観光交流客数が174万人、2014年で620万人。あと5年で1000万人を超えられればと期待しています。約280のお店がある中心商店街には、空き店舗はほぼゼロです。疑いを持つ人は、三島の現場を見に来てください。あまり問題がないから、古くからの実績があり、斬新さが弱いから、なかなかテレビで放映・紹介されず、地道に着実に発展していています。

グラウンドワーク三島では、現在までの実践地が、60箇所以上もあります。まちづくりの基本的な考え方は、まず「面」を作ることから始めるのではなくて、課題を抱えた「点」を改善することから始めています。地域での問題は「点」から始まります。点・現場に関係している「人」から始まります。夫婦関係もそうでしょうか？男女関係もそうです。みんな人が関わっています。人と人が、協力し合えば、点の問題は解決できます。しかし、この点の問題を解決することは、人が絡み、意外と難しいものです。

いろいろとプライバシーの問題もあり、複雑怪奇です。人と人が引き算、対立すると、地域の中に膿・問題が噴出してきます。美しい湧水池にごみが捨てられる、素敵な水辺に雑排水が垂れ流される、歴史的な鎮守の森が放置され日陰になってしまうなど、管理に地域住民の手が届かなくなるんです。よく見ると、考えると、それが「地域の宝物」なのです。文化的・歴史的な場合もあります。

大切にする必要については、多様な考え方が現出して、意見の対立があり合意形成が困難になります。意見統一が一番難しいのです。だから、行政は議論を避ける傾向があります。なぜ避けるのか。行政の土地ではないからです。民地を行政が整備することは、公共用地として買収する限りあり得ません。

地域を安全に美しく維持していくことは、市民の力を結集する方法が、課題解決への早道です。市民共通の協賛の声と具体的な行動がなければ、地域の力にはなりません。この力は、行政がつくることはできず、生活者へのきめ細やかなサービスの提供は、行政はできません。皆さんは、行政はスーパーマンだと思ってらっしゃるんですか。膨大な国家的な借金を抱え、課題の処理・対応能力は脆弱化・硬直化しています。そんな意味では、地域での小さな課題解決のためには、行政が機動的に動けなくなっています。

市民力が脆弱なまちから流民が増加

そこで、行政の手が届かない社会的な隙間に入り、人間的なサービスを提供していくのが、NPOの役割だといえます。皆さんの役割と責任は大きいのです。素敵なまちが作れないと思ったら、そのまちを離れるのも一つの方法です。この流民は、江戸時代や戦国時代にもありました。私は、これから流民が増えてくると思います。あるまちは社会保障が充実しているとしたら、そちらのまちに人々は移動します。

三島市に隣接する長泉町では、高校生まで医療費は無料、児童手当は5万円、三島市と比較するとかなり税金が安いんです。長泉町では、今後とも、人口が増えるという予測が出ています。そういう意味では、お金持ちのまちなのです。分析してみると、町内にNPOが沢山存在しており、行政の仕組みを側面的に支えているんです。その仕組みを、皆さんは学ばなければならないのです。

隣の沼津市の人口は、23万人、三島は11万人です。市民団体やボランティアの数は、三島市が静岡県で一番多いんです。ボランティア団体は約280団体、NPO法人は60団体以上、沼津市はボランティア団体は60団体、NPO法人は30団体です。この違いは何でしょうか。これはある意味で、行政依存の違いだと思います。住民側に困りごとがあると、政治家に頼んで、行政の支援を仰ぐ、その政治や行政への依存・甘えの考え方が蔓延しています。沼津駅前には閑古鳥で、どんどん衰退して行っています。

地方新聞の記事掲載は、三島市関連の記事が多いのかなと思います。特に、沼津市で市民活動に関わる記事は少ないなと感じています。今、津波への不安から、主に沼津市の海岸線に居住している人で、三島市に移住したいと希望する人が増加しています。どんどん三島の方に住民が流れてきているのです。

多様な市民活動の現場が回廊性を創る

グラウンドワーク三島は今までに、沢山の多種多様な地域改善活動に取り組んできました。点を改善して、川と道路の線で結べば面・まちになります。私たちの活動は、点から線、線から面に、時間はかかりますが変えてきました。どうして現在、620万人もの観光客が来ているのでしょうか。調査してみると、多くの観光客は、一人で10回以上来ている、リピー

ターです。ですから、ベースとなる観光交流客数は50万人位なのかなと思います。10回かけますと500万人近くになります。

リピーターの理由は、再度訪問したいと思う、多様な観光地・見学先があることではないでしょうか。具体的には、「水の仕掛け」と呼ぶ、素敵で魅力的な観光地が街中に点在しているのです。1回だけでは行ききれないのです。「春夏秋冬」が素敵なのです。それぞれ雰囲気違います。そういう個性的な魅力は行政が作ったわけじゃないのです。市民が主体となり再生・整備したものであり、それが魅力的な観光地となり訪問してくれる観光客が増えたのです。

賢明に地域のために、市民が協力して、頑張っ、後ろを振りむいてみたら、すごく素敵なまちができていた。「まち磨き」につながったのです。「すごく良いものが街中に残っているね、これを観光資源に使わなかったら損だね」ということが切っ掛けとなり、今、相乗効果により有機的に物事が動き始めています。三島市では区画整理はいままで実施されていません。江戸時代の街図を今のまちに重ねると、時代の経過を超えて、全くそのままのまちなのです。

これは組織体制の図です。グラウンドワーク三島が真ん中に存在していて、環境団体や大学、その他の団体、三島市、企業が207社等と連携をしながら全体力を機動的にまちの課題解決にぶつけているというのが実態です。

「水の都・三島」の原風景と原体験の再生がコンセプト

グラウンドワーク三島の活動のコンセプトは、環境再生を行い、合わせ、地域再生をしようということです。さらに、農業再生をしながら、その農産物を販売するNPOビジネスを創業するというのが、私たちの24年間の活動の蓄積、経過です。

これが、環境再生の事例で、1955年頃の源兵衛川の写真です。怖いほど、多くの富士山からの湧水が源兵衛川に流れ、豊かな水辺空間を形成していました。

しかし、1964年の東京オリンピックが開催された高度成長の時代になると、上流側での地下水の汲み上げにより、川から水が消え、ごみが捨てられ、ヘドロが溜まり、悪臭を放ち、油が浮き、魚は死にました。この状態が、約26年間にわたり続きました。

私たちが、グラウンドワーク三島を設立した理由ですが、汚れた源兵衛川を、管理者である中郷用水土地改良区は、臭いから埋めてしまおうと計画していました。農林水産省の水質汚濁防止事業を導入して、埋めてしまおうとしました。とんでもない暴挙だ、昔の川に戻すべきだという思いを持った三島っ子が集まり設立したのが、グラウンドワーク三島です。

皆さんのまちにも、知らないうちに、厳しいベクトルやインパクトがかかりつつある危機的な所があると思います。日本全体に、そんな地域課題が存在していると思います。私は、この厳しい地域課題は何にも難題ではないと考えています。地域の人々が一体化して、立ち上がるためには、市民のパワーが必要なんです。それが危機意識であり、切迫感や追い詰められた気持ちです。人は追い詰められないと爆発力や集中力が発揮できません。逃げる人、避ける人もいます、自分の生活があるから参加できない人がいます。

だから、やろうと決意した人は、命をかけてもらわないとうまくいきません。そんなに半端なものじゃありません。事務局長なんか、責任が重く、辛いことも多いので、絶対にやっ

ちゃいけないものです。そんな暇と余裕があるなら、まずは、早く家に帰って、家族の生活を大切にしたいんじゃないかと思います。私は、9つのNPOの事務局長を担ってきただけです。こんな馬鹿らしく、あほらしく、儲からないことは、やめた方がいいかもしれません。

重い責任がかかりますよ。人がイベント中に、事故で死亡したら、事務局長が裁判・訴訟の相手になる場合が多いと思います。この厳しい事実を承知していますね。敗訴になると、自分の財産を失ってしまう危険性も内在しています。このリスクを、承知・覚悟していらっしゃいますよね。そのぐらいの強い気持ち、意思を持ち合わせていないと、源兵衛川の水辺再生はできなかったと考えています。

そんなわけで、グラウンドワーク三島は、農林水産省の補助事業を白紙に戻して、もう1回、原点からのスタートを開始しました。まずは、私が一人で、汚れてしまった、源兵衛川のごみ拾いから始めました。少きれいになってから、子どもたちや地域住民に声をかけ、さらに、ごみ拾いを続けました。1年半は、僅かの人しか応援してくれませんでしたので、数人で地道にごみ拾いを淡々とやってきました。

しかし、1年半位が経過すると「お兄ちゃん何やってんの」とか、「コーヒー持ってきたよ」とか、「ケーキあるよ、食べませんか」とか、この不景気の時代にケーキを持ってきてくれました。とんでもないバケツみたいなでかいケーキを持ってきたのですが、その時、二人しかいなかったのです。二人で食べるんです。苦しいことだと思いませんか。ビール飲みながら、ケーキを食べることもありました。コーヒーの中に、ビールを入れたり、ケーキに穴掘ってビールを入れたりして、とにかく、スプーンで食べたこともありました。だから、私はこんなに太ったんですかね。あのおばちゃんたちの責任です。しかし、食べないと申し訳ないので食べたのです。というわけで、いろいろな人がだんだん集まって来ます。なかなか、静かな池に石を投げる人は大変ですけど、面白いでっせ、その微妙な反応にうずうずしてきます。人ってだんだんと興味を持ってくると、無関心の臨界点を超えると、マジに前向きな胎動・微動が起きます。

市民力・地域力を結集して源兵衛川の清流を再生

とにかく、源兵衛川の水辺再生の手法について、話し合いました。この川の流域には、13の町内会があり、約2万人の住民が住んでいます。約3年間にわたり、約200回の話し合いの場を持ち、延2万人の住民と話し合いました。「この川をどうしたらいい、ああしたらいい。なぜ汚くなったのか、昔はこういうトンボがいた、魚がいた、水神さんがあった、ここで水が湧いていた」など、いろいろな情報を集めて、それを整理・分析・評価し勉強会を開催して、多くの住民に源兵衛川に関心と興味を持ってもらいました。

年間で87回の勉強会を開催しました。これは結構大変だったんですが、楽しかったですね。終わったら、よく飲み屋に行きました。酔っぱらってしまい、誰が金を払ったのか、私はほとんど支払った記憶がありませんが、支払の雰囲気になった時に、便所に行って避けるという特殊な能力を身に付けたのも、これらの勉強会です。皆さんも真面目に生きて損をするかもしれませんね。

努力を続ければ、汚れていた源兵衛川も、とてつもなくきれいになるわけです。これまでに、まったく何にもなかった川に「水辺の散歩道」を作り、自然植生を増やしました。今では夏になりますと、約千人以上の子どもたちが川遊びをしています。近くの水辺の空間に、おじいちゃんやおばあちゃんが、にこにこしてベンチに座り、孫が裸になって泳いでいる。この光景・姿が、私たちの目標だったんです。

人は、やろうと強く思えば何でもできます。無理だと諦めたら、その時点で物事は終わりです。もし当時、当初計画のように、源兵衛川を暗渠化して蓋をしていたら、「水の都・三島」の原風景は傷つき終わっていたでしょう。私も三島を捨て、大阪に来ていたかもしれません。そういう意味では、私たちの発想と行動、方向性は適切だったと自負しています。

ボランティアとしての達成感・満足感は、このような自己満足の気持ちです。「俺がやった」と思う気持ちが、まちを愛する愛郷心につながっていきます。現在までの24年間で三島市長は、4人変わっていますが、みんな「源兵衛川は僕がやった」と主張するんです。市長ですから主張するんです。県議員は見解が違うんです。府議員はなんていうのか不愉快ですか。そんなことを言っちゃあいけないですね。誰もが、全部スターなのです。それでいいんです、いい答え成果が地域に残ればみんな幸せになります。

この写真は、施行前後の比較写真です。同じ場所なのですが、汚かった川を、こんなにきれいにする力を、皆さんはお持ちなんです。地域づくりとは、まちを変える力なのです。

活動の目標・指標を持ってまちづくりを展開

グラウンドワーク三島の活動目標の1番目は、「源兵衛川の水辺再生」です。

2番目は、もともとあった「三島梅花藻の復活」です。水温15℃で育つ水中花ですが、水質が汚くなれば、真っ赤になって溶けてしまいます。水温も0.5℃上がりますと真っ赤になって溶けます。繁殖していることは水温も水質も平常である証です。リトマス試験紙みたいな地下水の監視役、モニタリングの道具ともいえます。

静岡県による電線の地中化工事のミスにより、コンクリートを川に流してしまったわけです。わかるだけで約1700匹の魚が死にました。絶滅危惧種のホトケドジョウを約500匹以上殺してしまいました。これが12月23日に発生したのですが、当時の知事にも電話して工事を止めました。この事故がきっかけとなり、静岡県の公共工事では、川の工事については、川に関わる環境NPOに工事内容を説明・協議して、NPOの同意と理解をもらわないと工事に着手することができない、仕様書になっています。

結果、川の工事を受託する業者は、最新の神経と配慮をして、下線工事に対応しています。今までは勝手気ままに川の工事を実施していたと思いますが、今では、かま場を作って、コンクリート車を持ってきて、バキュームで排水を吸い上げ、浄化して流さないと工事ができないようになってきました。「ピンチはチャンス」とよく言われますが、そういう意味では、源兵衛川でのコンクリート流出事故が、土木の仕様書を変える絶好の切っ掛けになったのです。

3番目は、「ゲンジホタルの再生」です。現在、5月から6月には、延べ1,500匹以上のゲンジホタルが、源兵衛川を乱舞しています。

4番目は、「実践的環境教育の実施」です。11回、川の掃除をして、ヘドロを上げ、約2,200名、毎年小中高、幼稚園も含めて環境教育をやっております。子どもたちの水辺の遊びをやっております。

私たちは、自然環境調査をやっておりまして、市民運動がよく陥りがちな感情的な運動というのを一切やっていません。全て科学的に調査をしております。例えばホテルにつきましては2年前、毎日二人の方に歩いて頂いて、どこにどういう風に飛んでいるか、全部図面もあるのですが、僕は10年間の調査をしております。例えば、一番飛んだのが90何匹で6月の始めでおわかりだと思います。

ゲンジボタルの発生図ですが、少しピークの山がずれています。発生総数も1,400匹で前年度よりも200匹以上増えています。なぜ、こういうことをやっているかという、市内の一斉清掃は50年間続いておりまして、これは5月初めの連休にやるんですね。これは川に対してもすごいインパクトを加えるわけです。ホテルを殺し、魚の産卵期ですから魚の卵を全部刈ってしまいます。ヘドロを上げてしまいます。

この環境被害を何回も市長や町内会長に説明しても、中止になりません。もう10年前から、源兵衛川から、少しずつ止めてもらって、そこがどのように生態系が改善されていくのか、豊かになっていくのか、科学的な自然環境調査をして、その結果を、市民に報告会で知らしめています。5年前には、源兵衛川全線1.5キロの河川清掃を中止させました。その効果で、ゲンジボタルが400匹増えました。魚もあつという間に増えました。今後、5年以内には、三島で全ての河川清掃を中止させます。

そうならば、三島市内全域でゲンジボタルの飛来が期待できると思います。何故、行政は既成事実を中止、休止できないのでしょうか。その環境被害の事実関係を科学的に説明しても止めようとはしません。この思考、対応はどこからくるのでしょうか、これだけ科学的に実証しているのに。やっちゃいけないと言っているわけじゃないんです。環境に悪影響を与えない、7月頃に実施してほしいと提案しているだけなのですが。

ふるさとの森・松毛川河畔林の整備

これは、松毛川の河畔林です。全部で1306本の林と100年以上の巨木が132本あります。源兵衛川が1.5km、その後、下流の田んぼに灌漑されて、最終的な末流が、狩野川の旧川敷となる松毛川になります。

グラウンドワーク三島の活動の手始めは、川のゴミ拾いから始まります。また、水質悪化の原因となるホテイアオイが繁茂したことから、これを市民総出で回収し処理して水面を確保しました。

しかし、周辺の巨木は、次第に枯れていきます。これは、100年以上たったクスノキとハンノキなのですが、枯れてしまった場所を1m50cmほど、土を排除して良質土と入れ替えました。その後、学生を中心として、地域住民とともに植林活動を始めました。続けて、成長とあわせて下刈りをしています。植林後、3年ほどが経過すると、こんなに大きな森に成長します。非生産的な会議をしている暇があったら、植林の現場に行きませんか。会議後に、一杯飲みに行き、上司の悪口を言い合う暇があったら、資金的な協力をしてください。苗木は3年生、5年生の苗木を植えており、1本1,500円から2,500円します。しかし、高い分、成

長も早く、新たな森づくりには効率的です。そういう意味では、お金を寄付していただけると、河畔林がどんどん拡大していくのです。

これは河畔林沿いに繁殖・密植している高さ 20m の竹林です。この竹林の中に、河畔林の巨木が入っています。50 年以上も間伐、管理していない竹林です。5 年前より伐採を始めて、私もこの中で作業をしています。ひたすら愚直に伐採作業を続けました。伐採した竹は全てチップ化して、肥料に活用しています。その効果により、植林地に雑草が繁茂せず、植林した苗木の活着率は 99% 近くです。

無駄に見える竹林は、実は、「資源」であり、有益な「肥料」になります。1 本も無駄にしていません。全て、地区内で多様に活用しています。この巨木を覚えておいて下さい。間伐後は、こんなに素敵で河畔林に変身します。このように、荒れた河畔林を再生していくわけです。土曜日と日曜日を中心として、松毛川に来て、河川管理者の沼津市と三島市の許可を得て、ひたすら、竹林を伐採して、竹チップ化し、土を混ぜ、ここに自然堤防を造成し、植林を繰り返していくわけです。すでに 5000 本植えております。企業とも連携して、活動を拡大・強化しています。

グラウンドワーク三島の活動の特性は、感情的な思いつきの市民運動ではありません。松毛川の場合、実施前に 2 年半かけて、この場所に、どのような森を作っていたらいいのかについて検討・議論してきました。地域住民との話し合いやワークショップを繰り返して整備計画を策定したのです。合意後には、1,500 戸ある地域住民は、この整備構想図を承知しており、持っています。間伐と植林の具体的な活動については、今後とも、継続していきますし、ずっとやっていかなきゃいけない責任を担っています。最終的には、今後、10 年かけて、この整備構想図のような素晴らしいサンクチャリー・ネイチャーパークの森を作っておこうという目標を立てております。

儲ける NPO ビジネスの経営と多様な市民活動を展開

グラウンドワーク三島は、「営利事業」と「非営利事業」を展開し、年間予算は約 1 億円です。非営利事業が 6 千万円、営利事業が 4 千万円です。街中カフェというお店を 3 店経営して結構儲けています。これらのお店で、15 人・65 歳以上のおばちゃんたち雇用しています。非営利事業には、11 人の職員がいて、(株)パートナーシップトラストという会社にも出資し、あわせ、農業生産法人も経営しています。営利性・事業性の高いものは、この会社で対応しています。最大の株主が、グラウンドワーク三島です。こんな組織体制で、活動を管理運営しています。

幼稚園・小学校・高校にビオトープを、学生とともに 4 か所造成してきました。また、三島梅花藻の里として、バイカモの増殖基地を造成しました。2 年ほど前、この里の上流部の水源地が突然不動産屋に売却されてしまいました。そこで、この貴重な土地を保護・保全すべく、買戻しの市民運動を始めました。私たちが了解していない間に突然、造成工事が始まったので、体を張って工事中止させました。その後、約 1 万人の署名と 1 千万円の募金を 3 か月の短い期間で集中的に集めました。

その成果を持って、三島市長に三島市による買収を陳情し、議会の同意も取り付けて、三島市による土地買収が、5 千万円の予算計上により水源池の買戻しが実現しました。現在、

グラウンドワーク三島が、募金とともに助成金を確保して、この水源池の整備工事を実施しています。この世の中には、不可能はありません。絶対に必要とされる重要事項は、市民力を結集すれば、その夢の実現は可能です。正論は、多分、行政も政治も理解してくれます。ですから、主張すべきものは主張すべきです。正直嬉しかったのは、「グラウンドワーク三島、頑張っているよね」と、90回近く開催した街頭募金の時に声をかけてくれました。これもNPOの評価の指標の一つではないと考えています。

グラウンドワーク三島は、この活動を展開する際、感情的にこの水源池を買ってほしいと一方通行の要求をしていません。論理的に説明していきます。その一つの方法として、ここに三島の駅があって、小浜池という水源池があり、そこからの源兵衛川があります。ここを歩けるんです。しかし、現実的には、ずっと歩いたら戻ってこなければならず、回遊ルートがないのです。今回、ここを整備することにより、隣接する御殿川をさかのぼってくる、新たな回遊ルートができあがり、水辺と森、街中が一周できる回遊性が高まります。そのまちづくりの企画書・整備案を策定し、三島市長や議員に提案したのです。

境川・清住緑地・大湧水公園の整備計画を提案

次は、境川・清住緑地の説明です。素晴らしい森と湧水池があるのですが、隣接地の養鱒場が民間企業に買収されてしまい、埋め立てられてしまいました。そこで、ここでも、この大切な湧水池を買い戻そうということで市民運動を開始しました。

三島市と清水町にまたがる約1.3haの土地・谷地田であり、ここを民間企業が、約1億3千万で買収したのです。そこで、約1億3千万で買い戻そうと、双方の首長を説得して、三島市は昨年11月に、三島市側の区域を5千万円で買収くれました。現在、清水町が残りを買収すべく調整を進めています。今後、市民総参加による水の郷検討委員会の議論を踏まえ、約4haにわたる大湧水公園の整備計画の実現を進めていきます。グラウンドワーク三島で基本構想図を描き、地域住民との議論を踏まえ、合意形成を図ったものです。ですからNPOはまちを変えられないとか、大きな仕事ができないなんてとんでもない話でございます。静岡県知事は、2回もここに来てくれていて、静岡県の土木事務所が工事を担うべく、川の改修と一緒に周辺整備をしようということが決まっております。

大場地区里山整備計画を提案

次は、大場地区の里山整備についてです。ここには、放置森林と耕作放棄の田んぼがあります。山の斜面に、古くからの農業用の掘削井戸があって、それが流れて田んぼの重要な用水源になっています。ホタルも、数千匹も乱舞しますので、ここを守ろうと里山を間伐して、再生整備しています。

儲かるNPOビジネスを展開

次は、NPOビジネスの展開です。廃屋化し、お化け屋敷状態だった、お店を改修して、グラウンドワーク三島が、耕作放棄地を活用して生産した各種の野菜やお惣菜を販売しています。1日8万円くらいを売り上げています。お年寄りにお化粧をして頂いたり、きれいなものを着てもらう衣料用品店・ゼロゴウメも経営しております。また、源兵衛川沿いに「せ

せらぎ源兵衛」という、三島コロケやかき氷などを売るお店も経営しています。1日、3店で、10万円程度、年間4千万の売り上げがあります。おばちゃんの給料が時間当たり1,000円で、管理責任者は65歳で約26万円の給与を支払っています。働けばお金が入る、知恵を出せば、儲ければ、給料が上がる、非常に単純な理屈・ビジネスモデルを作って、職員の皆さん、日々、頑張っています。次に、4号店の開店も検討中です。

皆の力でまちを地域を元気に

お話ししたいことはいっぱいありますが、この位にさせていただきます。最後に、皆さんにメッセージとしては、遠くから来て生意気な話でございしますが、私も今、走りながら試行錯誤しておりますし、怖くて後ろを振り向けません。毎年の運転資金が確保できるのか、職員の給料が払えるかなと思って心配が尽きません。正直24年間もよくやってこられたなと思っております。本当にいろいろが不安です。

しかし、人ができなかつた、有意義な事を成したという自負はもっております。一人では、絶対にできません。しかし、物事は、一人から始まります。皆さんも、これから頑張っていくてください。大いなる覚悟を持って頂き、しかし、覚悟を持つと固い雰囲気になっちゃうんで、いい加減にやっていく、そして、私が県庁時代38年間で、覚えた最大のテクニック・死んだふりを学び、対応していきましょう。

怒ってみたり、声を荒げたり、人と喧嘩をしようとしたり、悪口を言っている、NPOがいたとしたら申し訳ありませんが、その組織は3年位で崩壊すると思います。人の悪口を言うと、必ずブーメランのように回ってきて、自分の所に戻ってきます。足元が砂上の楼閣のように崩れていきます。

私はたくさんのNPOを見てきていますが、多くの組織は、内部的な些細な誤解や批判、悪口で、組織は脆弱化し崩れていきます。これらの事実と経験も、NPOの人間修行ですので、弱者、敗者という意味では、社会のウィークポイント・人のウィークポイントの関係になります。

自分もそんなに強い人間ではないので、お互いが、支え合いながら、楽しい人間的な世界を、思いやりのある世界を作っていくことが大切です。そういう意味では、普段の時に助け合いの連携軸を地域に作っておけば、災害時に、必ず助け合いの仕組みが機動して、役立つことは間違いありません。一種の防災対策上の先行投資であり、行政の力にも限界がある中、皆さん自身で、自分の地域を守るセーフティネットを創るのです。

今後とも、公益的な市民活動を継続していただき、苦勞を重ねて頂ければと思います。必ず、素敵で安全なまちができあがります。努力を続けてください。ありがとうございました。



10 沢地グローバルガーデン

民間レベルの国際交流を実践するグローバル文化交流協会が主体となって、休耕畑をミニ公園に整備し、維持管理しています。作業には、三島市近隣に住む外国人や学生ボランティアの皆さんも参加し、作業を通じての「交流の場」となっています。



11 みどり野ふれあいの園

地域から、「雑草が生え、取り扱いに苦慮していた三島市の遊休地を公園化したい」との要請を受け、グラウンドワーク三島が協力して、半年間にわたる話し合いを経て、手づくりの公園計画を策定しました。その後、建設は地域住民が主体となり、企業（資機材の提供）や行政（水道施設の負担、樹木の提供）との協働で行い、愛着ある美しい公園が整備されました。



12 長伏小学校ビオトープ

児童が生き物と親しく触れ合える場をつくりたいとのPTAの要請を受け、コンクリートで被われた中庭を改修して、環境教育園としてのビオトープづくりを進めました。2年近いPTAと児童の勉強会を経て、児童・保護者と町内会、地域企業の協働作業により、2001年、自然度の高い「夢トープ」が完成しました。



13 中郷小学校ビオトープ

国道の拡張工事による池の移転をきっかけとして、グラウンドワーク三島の助言と、環境教育園にしたいとの児童の希望により、ホタルが飛び交うビオトープづくりを進めました。保護者・児童・教職員ら200人と地元企業との協働関係により、水路やホタルの飼育小屋をつくり完成させました。



14 三島南高校ビオトープ

三島南高校の生徒からの支援依頼を受け、2003年、グラウンドワーク三島、サイエンス部生徒、地元関係企業等との協働により「うっそうとした湿地」をテーマとした「三南トープ」が完成し、2008年に現在の場所に移転しました。絶滅危惧種の在来のメダカも生息しています。



15 函南さくら保育園ビオトープ

幼年期から水辺に親しめるビオトープをつくりたいとの依頼を受け、2004年、グラウンドワーク三島、園児、保育士、保護者と地元企業等との協働により、掘り抜きの技法で井戸を掘りました。在来の植物やメダカを移し、多様な生物が生息する「遊子(ゆうし)・トープ」が完成しました。



環境教育

市内の鎮守の森や湧水による川や池をフィールドに、親子を対象とした様々な自然観察会や水辺の勉強会を開催しています。



鎮守の森探検隊 「バイリンガル環境かるた」



環境人材の育成

環境教育や実践地で活躍する市民インストラクターの育成を進めています。



グラウンドワーク三島の実践地での研修

空き店舗を活用した「にぎわい再生活動」

街中の空き店舗を活用し、シニアが中心となって運営・管理する「三島街中カフェ」を3店舗開店し、新たな市民サービスを提供しています。



1号店(惣菜・地元野菜など) 2号店「ZEROGO-ME」(婦人服) 3号店「せせらぎ源兵衛」(水辺のカフェ)

環境コミュニティ・ビジネス

地域の人的資源(シニア・若者など)や環境資源(荒廃里山・農地など)の活用に取り組んでいます。間伐材や放置竹林の青竹を活用した木・竹製品の製作販売、箱根西麓地域や御園地区の遊休農地を活用した「三島そば」栽培などの援農活動をおとした地域農業ブランドの創出を進めています。



せせらぎシニア元気工房



満開の「三島そば」

企業との連携(CSR)

大手企業との協働による植林活動や農業体験などの環境再生プロジェクト、環境教育プログラムの企画・実施、新入社員研修の受け入れをはじめ、環境バイオトイレの国内外への普及活動等を進めています。



三島そばの収穫・脱穀体験

広がるグラウンドワーク三島の活動(国内・海外)



日英若者交流

日韓バイカモ交流

世界各国からの視察

グラウンドワーク三島の参加団体

三島ゆうすい会、源兵衛川を愛する会、三島ホタルの会、桜川を愛する会、(公社)三島青年会議所、三島建設業協会、中郷用水土地改良区、三島市指定上下水道工事店協同組合青年部、グローバル文化交流協会、日本大学国際関係学部国際協働部、建築文化研究会、三島まちづくり21、21世紀塾、NPO法人ふじのくにまちづくり支援隊、宮さんの川を守る会、境川・清住緑地愛護会、三島ワイズメンズクラブ、遊水匠の会、大通り商店街活性化協議会、三島商工会議所

NPO法人グラウンドワーク三島 〒411-0857 静岡県三島市芝本町7-11

TEL 055-983-0136 FAX 055-973-0022 E-mail info@gwmishima.jp

URL <http://www.gwmishima.jp/>

2014.7.4.000



源兵衛川のホタルの乱舞

静岡県三島市は、富士山からの湧水が清流となり街中を網の目のように流れる「水の都」でした。しかし、1960年代、上流地域の産業活動の活発化にともなう地下水の汲み上げにより、市内を流れる川は水量減少で淀み汚れ、ドブ川になってしまいました。このふるさとの環境悪化に危機感を持った熱心な人々と8団体は、「水の都・三島」の原風景・原体験の再生を目指し、1992年9月に「グラウンドワーク三島」をスタートさせました。

グラウンドワークは、英国発祥の市民・NPO・行政・企業のパートナーシップによる環境改善活動であり、グラウンドワーク三島が全国に先駆け導入し、「地域協働」を実現するための実効性の高い処方箋として活用してきました。

現在までに、ドブ川化した源兵衛川の水辺再生、絶滅した水中花・三島梅花藻(ミシマバイカモ)の復活、松毛川周辺の貴重な河畔林の保護活動、歴史的井戸や水神さん・お祭りの再生、ホタルの里づくり、学校ビオトープの建設、住民主体による公共施設の計画づくりと維持管理等、60カ所以上のプロジェクトを実践してきました。1999年10月には特定非営利活動法人の認証を受け、現在では、20の市民団体が参加した「ネットワーク組織」になっています。

これら水辺環境の再生から始まった活動は、環境再生から地域再生へと拡大し、毎年約1,500人・約100団体が国内外から視察に訪れています。近年では、地域の人的資源や環境資源を生かした「せせらぎシニア元気工房」の開設、遊休農地を活用したそば・小麦栽培などの「環境コミュニティ・ビジネス」の創出、エコツアーなどの観光振興、「三島街中カフェ」「ZEROGO-ME」「せせらぎ源兵衛」等の創業によるにぎわい再生、さらに、これらの先進的なノウハウを海外に普及する「国際環境交流事業」にも取り組んでいます。

2010~2012年度には、内閣府「地域社会雇用創造事業」及び「復興支援型地域社会雇用創造事業」の一環として、これら多様な実践現場を、先進的な現場モデルとして活用し、地域ビジネスやNPOマネジメントを学ぶ「グラウンドワーク・インターンシップ」事業に着手し、約200人の社会起業家の輩出と、約3,000人の社会的企業を担う人材育成を行っています。さらに東日本大震災以降、子どもとご家族の心のケアを目的とした「子どもを元気に富士山プロジェクト」を立ち上げ、継続的な支援活動も展開しています。

今後とも「右手にスコップ・左手に缶ビール」「走りながら考える」を合言葉に、「ミッション・アクション・パッション」を活動の心根に秘め、地域から日本の元気再生の規範になれるよう戦略的で地道な市民活動に挑戦していきます。

復活したミシマバイカモ

① 源兵衛川再生

「水の都・三島」の清流のシンボルである源兵衛川は、1960年代から湧水の減少が進み、渇水期には家庭雑排水の垂れ流しやゴミの放置により水辺環境が悪化しました。心を痛めた多くの市民が立ち上がり、市民・NPO・行政・企業がパートナーシップを組み、身近な環境改善を進める新たな市民運動であるグラウンドワーク活動に取り組みました。

現在



1980年代



地域住民の声をもとに、グラウンドワーク三島が関係者相互の調整役となり、親水施設が整備され、お互い同士が協力し合い、源兵衛川の水辺環境の再生に努力しました。事業終了後も、地域住民の手によって生態系を守り育てる地道な活動が続けられ、今ではゲンジボタルや絶滅危惧種のホトケドジョウが生息する自然度の高い川に変貌しつつあります。

② 宮さんの川・ほたるの里

湧水が枯渇し湿地状態になっていた宮さんの川上流部に水を流し、人工的なせせらぎを作り、ホタルが成育できる水辺環境を作りだしました。三島市の「街中がせせらぎ事業」との協働により、グラウンドワーク三島が三島ホタルの会等の専門的なアドバイスを受け、地域住民とともに建設しました。



③ 三島梅花藻の里

湧水の減少と水質悪化により市内の川から姿を消した水中花・ミシマバイカモを復元、育成するために、1995年に(財)佐野美術館所有の湧水池を借り、増殖基地・観光スポットとして環境整備を行いました。現在では増殖した清流のパロメーターであるミシマバイカモを各河川に移植し、原風景の再生を進めています。



④ 境川・清住緑地

静岡県沼津土木事務所からの要請を受け、グラウンドワーク三島が自然観察会や住民参加のワークショップを開催し、地域住民の意見やアイデアを収集した地域固有の生態空間を再生しました。今では地域住民が主体となった境川・清住緑地愛護会が、行政からの維持管理を委託されるまでになり、豊かな生態系が回復しています。

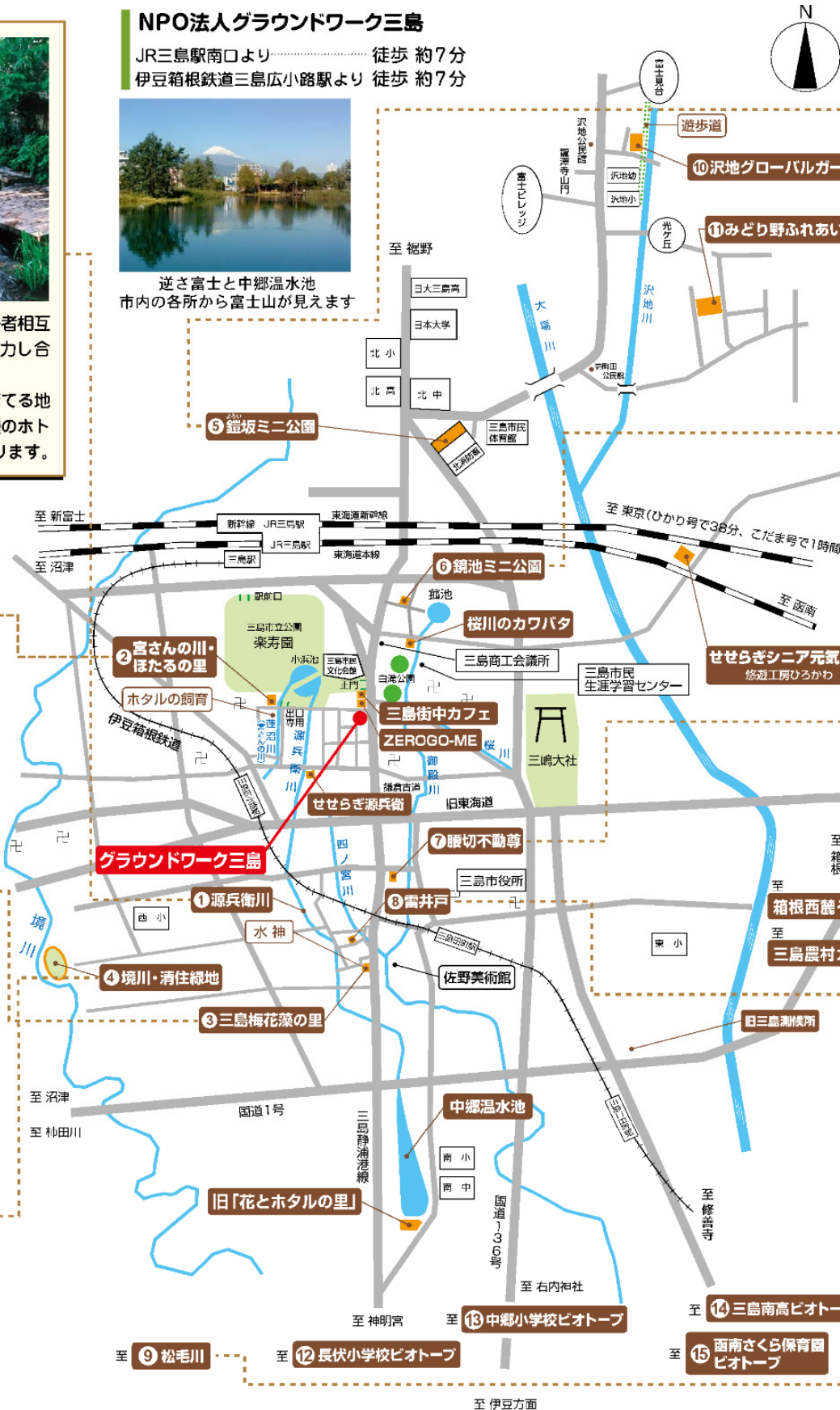


NPO法人グラウンドワーク三島

JR三島駅南口より 徒歩 約7分
伊豆箱根鉄道三島広小路駅より 徒歩 約7分



逆さ富士と中郷温水池
市内の各所から富士山が見えます



⑤ 鏡坂ミニ公園

県道沿いで放置され、ゴミ捨て場化していた遊休地を、グラウンドワーク三島が調整役となり、町内会や子ども会・老人会とが一体化し、行政と地元企業との協力関係により、地域総参加で作らせたミニ公園です。現在、地元住民が愛着をもって維持管理を担っています。



⑥ 鏡池ミニ公園

かつては富士山からの雪解け水が勢いよく湧き出る水源であり、三嶋大社に参拝する人々が身を清める場所として利用されていたと言われていました。湧水が涸れ、忘れられていた歴史的遺産を再整備しようと、町内会や地元企業との協働によりミニ公園に整備しました。



⑦ 腰切不動尊

江戸時代に近くの御殿川に流れ着いた、腰から上だけが彫られた石仏をまつたと言伝えられています。近くには「御殿地」ゆかりの石畳(通称「こうらぶせ」)や古井戸が残っています。井戸を再生し、途絶えていたお祭りを町内会や子ども会、大学生とともに40年ぶりに復活させました。



⑧ 雷井戸

雷井戸は、1年を通して湧水が自噴している市内最大の井戸です。かつては田町簡易水道の水源でしたが、その役目を終え放置されていたものを、グラウンドワーク三島が泉トラスト運動により買収し、地域住民や企業との協働により整備を進め、維持管理を行っています。



⑨ 松毛川

狩野川の旧河川敷で、生態系豊かな河畔林が今も残る「ふるさとの川と森」ですが、開発による水質悪化や外来種の侵入、河畔林の倒木などの環境被害が進んでいます。そこで、地域住民と共に「千年の森」づくりに向けた自然観察会や植林活動等を実施し、具体的な自然再生の計画づくりを進めています。

